

二〇二〇年度 田園調布学園大学

全学部全学科専攻 共通

国語 入学試験問題

一般入試B日程

| 受験番号 | | | | |
|------|--|--|--|--|
| | | | | |

(注意)

- 一、解答は、すべて別紙の「解答用紙」に記入してください。
- 二、受験番号と氏名は、「問題用紙」と「解答用紙」の両方の所定の欄にかならず記入してください。
- 三、「問題用紙」と「解答用紙」は、試験終了後、かならず提出してください。
- 四、「問題用紙」に「下書き」「書き込み」などをしてもかまいません。
- 五、試験時間は六〇分です。

| 氏名 |
|----|
| |

(一) 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

先日、日本からの訪問客と一緒にミュンヘンで地下鉄に乗った。その人は周りを見回してこう言った。

「ドイツ人は身なりが質素ですね。おしやれをしている人はあまりいませんね」

A、ドイツ人の服装は日本人に比べると質素だ。女性は男性に比べて身なりに気を遣っているが、多くの男性は無頓着である。彼らがスーツなどを着てきちんとした服装をするのは、就職の面接や顧客とのミーティング、オペラやコンサート鑑賞などの時だけだ。

最近では、ベンチャー企業だけではなく大手企業でも、ポロシャツにジーンズ、スニーカー姿で働く人が増えている。ネクタイを着けている人など、地下鉄の中を見回してもほとんどいない。あるドイツ人は、「スーツは1着、ネクタイは1本しか持っていない」と言っていた。別のドイツ人はある企業の課長だったが、スーツ上下は夏用を1セットと、冬用を1セット持っているだけだった。スーツの上着の肘の部分が薄くなっても、補強のための布を縫い付けて着続けている人は珍しくない。

同じヨーロッパでも、ミラノやパリに行くと、女性だけでなく男性の間にもファッションセンスが良い人をよく見かける。髪に白いものが混じったスーツ姿のビジネスマンでも、ジャケットとシャツ、ネクタイの色の組み合わせに気を遣っている。

B、ドイツではそのような人にはめったに会わない。大半のドイツ人はファッションに無関心だ。彼らは洋服にあまりお金をかけない。このため紳士服の店などは、バーゲンセールなどの時を除くと客の姿は少なく、b閑古鳥が鳴いている。これで洋服店はやっていけるのだろうか、余計な心配をしてしまう。

ドイツ人は日本人に比べると、「見た目」を気にしない。①ドイツ人の国民性の一つは、強烈な個人主義。あくまでも「ゴーイング・マイ・ウエー」であり、他人が自分のことをどう見ようが構わないという人が多いのだ。彼らは外見よりも中身を重視する。

食事も質素だ。ほとんどのドイツ人は、夕食ではまず火を使った料理をしない。夕食はパンやハム、チーズだけの「アーベントブロット(直訳すると夕方方のパン)」と言われる質素な食事で済ませる。パンだけならば夕食は非常に安く済む。**C**ドイツで人気が高い安売りスーパー

「アルデイ」は、トースト用のパンが入った500グラムの「ミューレンゴルト」というパックを売っている。その値段は、パン20枚でたった55セント(72円)である。パンが20枚も入っているのに1ユーロ硬貨(130円)でお釣りが来るわけだ。

D、ドイツのパンにもピンからキリまであるが、大半の庶民は、アルデイで売っているようなお徳用のパンを食べている。また、旧東ドイツやベルリンでは、物価がミュンヘンよりも安い。ある時、ベルリンのパン屋でプレートヒェンと呼ばれる丸パンを買ったら、わずか15セント(19・5円)だった。

私の日本人の知り合いは、「ドイツ人から自宅での夕食に招待された。行ってみたら出てきたのはカボチャのスープとパンだけだったのでびっくりした」と言っていた。

ドイツのほとんどの家庭では、昼間は夫も妻も会社や役所で働いている。**E**、平日には買い物をしたり調理したりする時間があまりないので、夕食はパンで簡単に済ますという家庭が多い。

我々日本人にとって、外食とは大きな楽しみであり一種の②「ハレ」の場である。日本人やフランス人、イタリア人には、「たまには良いレストランへ行って豪華な食事をしよう」という人が少なくないが、ドイツにはめったにいない。日本で外食をすると1万円札がすぐに消えてしまうが、ドイツ人が100ユーロ札（1万3000円）を1回で1人分の食事のために使うことはほとんどない。日本人ほど頻繁に外食をしない。

ミュンヘンの高級レストラン「タントリス」は、2018年6月の時点でミシュランガイドから2つ星を与えられている。ここで夕食をとりワインを飲むと、1人あたり150〜200ユーロ（1万9500〜2万6000円）はかかる。ミュンヘンに駐在している日本企業関係者の中には「話のネタにタントリスでも行ってみるか」という人もいるが、ミュンヘンに住む市民の大半は、cセッターでもされない限り、自腹を切つてこの種のレストランに行くことはない。

③「江戸っ子は宵越しの金を持たない」というような金銭哲学は、ドイツ人には無縁である。

中層階級の上の方に位置するようなサラリーマンでも、儉約家がほとんどだ。大半のドイツ人は10ユーロ（1300円）の支出でも慎重である。びた一文たりとも無駄にしない。

3人の子どもを持つ私の知人はある企業の課長だったので、それほどお金に困っていたわけではないが、マイクロソフトのエクセルを使って家族全員の毎月の支出を厳密に管理していた。

車に給油する際にも、ガソリンや軽油の値段が少しでも安いスタンドを見つけようとする。彼らは何かを他の人よりも1ユーロでも安く手に入れることに、大きな満足感を得ているように見える。よく言えば儉約家、悪く言えば F である。

日本は世界でもトップクラスの贈り物大国だ。クリスマスプレゼントやバレンタインデーのチョコレートだけではなく、お中元、お歳暮、旅行からのお土産、結婚祝いのお返し、香典返しなど、毎日のように大量の贈り物がやりとりされている。近所の人におすそ分けをしようと、お返しの贈り物をもらうこともある。そのお返しに対して、また贈り物をすることもある。④プレゼントの無限連鎖だ。

ドイツ人は、日本人ほど頻繁に贈り物をしない。旅行から帰ってきた時に同僚や友人にお土産を配る習慣もない。結婚祝いのお返しもしない。多くのドイツ人がプレゼントを贈るのは、彼らにとって最も重要な祭日であるクリスマスと誕生日くらいだ。

だが最近では、「今年子どもにクリスマスプレゼントを贈るのすらやめた」という家庭も増えつつある。その理由は、「毎年クリスマスにプレゼントを贈ってきたので、子どもはすでにいろいろな物を持っている。もう何をプレゼントに選べばよいかわからない」というものだ。⑤ある意味では、贈り物の飽和状態になっている。つまり、クリスマスプレゼントという形式だけに縛られて贈り物をするのはやめようというわけだ。もちろん、出費を減らすという目的もある。

ドイツ人の誕生日パーティーでは「プレゼントはいらないので、料理やデザートを持って来てください」と言われることが多い。招待する側は飲み物だけを用意する。こうした「持ち寄りパーティー」ならば、招待される方もプレゼントを買わなくていいのでお金の節約になる。

ドイツ人は、余暇を過ごすにもあまりお金をかけない。週末や休日には自転車に乗ってサイクリングをしたり、森で散歩をしたり、公園の芝生や河原、自宅のベランダで本を読みながら日光浴をしたりする人が多い。

ミュンヘンの真ん中には英国庭園と呼ばれる広さが375ヘクタールの公園がある。⑥鬱蒼と木が生い茂っており、野鳥のさえずりや小川のせせらぎを聞いていると、100万都市の真ん中にいるとは思えないほどだ。庭園という言葉よりは、dゲンセイリンという言葉の方がしっくりくる。夏の週末や平日の夕刻ともなると、この公園の芝生は太陽の光を浴びる人々で埋め尽くされる。

ここに寝転んで本を読んでいると、お金は全くかからない。冬が長いドイツでは、日本に比べると1年間の日照時間が短い。このためドイツ人たちは、我々日本人よりも春や夏に太陽の光を浴びるのを好む。

シミやそばかすができてもあまり気にしない。日本のように紫外線をe遮るために、顔全体を覆うサンバイザーをつけたり、真夏なのに長い手袋で上腕部を覆ったりしている人は、一人もいない。彼らにとっては、太陽の光を浴びながら⑦無為の時間を過ごすこと自体がすでに娯楽なのだ。平日の職場でのストレスから回復するために、週末や休暇にはあくせくせずのんびりと一日を過ごす。

あるいは、週末に友人をブランチ（朝食兼昼食）に招いて、コーヒーを飲みながらだらだらと世間話をする。お腹がいっぱいになった後は、近くの公園をのんびりと散歩する。

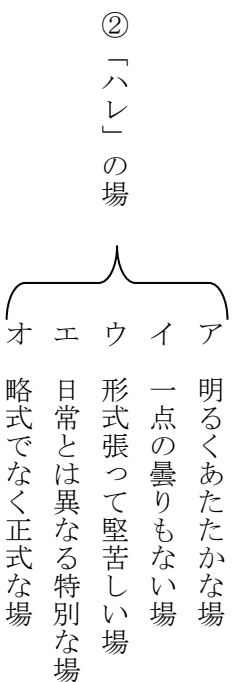
これが標準的なドイツ人の余暇の過ごし方である。我々日本人のように、休みの日にもショッピングへ行ったり映画館へ行ったり、「何か」をしていないと気が済まないという人は少ない。

つまりドイツ社会では、お金を使わない娯楽が中心である。生活の中で「消費」が占める比重が日本に比べるとはるかに低い。したがって、持ち物も少ない。ドイツ人の家に招待されると、日本人の家のように G、整然としていることが多い。

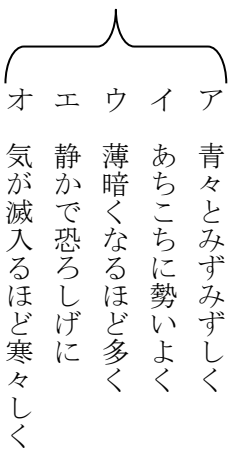
（熊谷徹『ドイツ人はなぜ、年290万円でも生活が「豊か」なのか』より）

問一 二重傍線部 a s e について、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

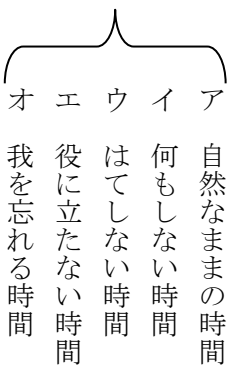
問二 線部②「ハレ」の場、⑥「鬱蒼と」、⑦「無為の時間」について、本文中の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。



⑥ 鬱蒼と



⑦ 無為の時間



問三 空欄A、B、C、D、Eに入る最も適切なことばを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア あるいは イ 決して ウ さて エ だが オ 確かに
カ たとえば キ つまり ク まさか ケ もし コ もちろん

問四 傍線部①「ドイツ人の国民性の一つは、強烈な個人主義」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ドイツ人は、異文化の影響を嫌い自国の文化を重視する傾向がある。
イ ドイツ人は、個人の権利と自由を何よりも重んじる傾向がある。
ウ ドイツ人は、他者に興味や関心がなく自己愛に陶醉する傾向がある。
エ ドイツ人は、他者の利益を軽んじ自己の利益を重んじる傾向がある。
オ ドイツ人は、どちらかというと個人よりも集団に価値を置く傾向がある。

問五 傍線部③「江戸っ子は宵越しの金を持たない」というような金銭哲学」とあるが、江戸っ子のお金に対するどのような考え方か。六十字以内で答えなさい。（句読点を含む）

| | | |
|--|--|--|
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |

問六 空欄Fに適する語をカタカナ二文字で入れなさい。

問七 傍線部④「プレゼントの無限連鎖だ」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 贈り物大国日本では、相手にプレゼントを一度でも贈ったら、その後も続けて送らなければならず、切りたくても切れない関係がずっと続く。
- イ 贈り物大国日本では、クリスマスやバレンタインのプレゼント、お中元やお歳暮、結婚祝いやお香典など年がら年中、贈り物をしていて途絶えることがない。
- ウ 贈り物大国日本では、ドイツのようにクリスマスと誕生日に限定されることがなく、各種様々な場面でのプレゼントが数えきれないほど存在している。
- エ 贈り物大国日本では、何らかの贈り物をもろうと、お返しので贈り物をするという習慣があるため、相互に贈る、贈られるという行為がずっと続いていく。
- オ 贈り物大国日本では、プレゼントを通して、クリスマスのように家族や親しい人だけでなく、お歳暮のように恩師や上司など様々な人間関係が延々と続く。

問八 傍線部⑤「ある意味では、贈り物の飽和状態になっている」とあるが、「贈り物の飽和状態」とはどのようなことか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 子どもに毎年プレゼントを贈り続けているので、もう十分でこれ以上贈る物はないということ。
- イ 子どもの欲しがるものをプレゼントとしてお金をかけてきたが、これ以上はもう経済的余裕がないこと。
- ウ 子どものプレゼントを考えるのに毎年工夫をしてきたが、もう考えつかないほど頭が疲れてきたこと。
- エ 子どもがプレゼントをもらうことに、また、親がプレゼントを贈ることに、もうお互いに飽きたこと。
- オ クリスマスだからといって毎年形式的にプレゼントを贈り続けてきて、無駄で使わないものがあふれていること。

問九 空欄Gに入る最も適当な表現を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 飾り物など見えず
- イ せせこましくなく
- ウ 散らかっておらず
- エ 派手派手しくなく
- オ 物が溢れておらず

問十 右の文章の趣旨として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人は外食をしたり様々なプレゼントをしたり、休日には買い物や映画館に出掛けたりするが、ドイツ人はそういう生活をする経済的な余裕がない。
- イ 日本人はお金がある程度かけて生活を楽しんだり人と付き合ったりするが、ドイツ人はお金を無駄に使わないで生活を楽しんでいる。
- ウ 日本人が贈り物をよくするのは人間関係にこだわりがあるからであるが、ドイツ人が最低限しか贈り物をしないのはあまり他人に関心がないからである。
- エ 日本人は服や食事にお金をかけるのが一般的であるが、ドイツ人はおしゃれをしたり外食をしたりすることは非常識だと考えている。
- オ 日本人は他人の目が気になるからお金を使い、ドイツ人はゴーイング・マイ・ウエーで人目を気にしないから余計なお金を使わない。

(二) 次の文章は、重松清の小説「キンモクセイ」の一節である。以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

もう四十年も前のことになる。僕が小学校に入学するとき、両親は百科事典を買った。全六巻か七巻のアちやちな事典だったが、わが家の家計では現金ではまかなえずに月賦を組んで買ったのだった。

両親は戦時中に子ども時代を過ごした。戦後は食べることに必死で、勉強をして上の学校に進むような余裕はなかった。

だから——なのだろう、両親は僕と芙美にたくさん本を買ってくれた。子どもたちに本を読ませて勉強させる、というより、本を買い与えられるほど生活にゆとりができたことの喜びを、両親自身が噛みしめていたのだろう。本を読む僕と芙美を、父も母も、いつもうれしそうに眺めていた。本を乱暴に扱ったり①ぞんざいな読み方をしたりすると、母はいつも悲しそうな顔になり、父はときどき、ゲンコツで叱りつけた。

「小学生に百科事典は早すぎたよなあ」

「まあね」

「高校生になって少しは使うようになったときには、もう、全然時代遅れだったしな」

イなにしろ、載っている世界地図では、アフリカ大陸の大半がヨーロッパ諸国の植民地になっていた。沖繩もまだ日本にaへんかんカされていなかった。そういう時代の百科事典だ。

「考えてみれば、もったいない金のつかい方だったよな」

苦笑して、あらためて箱を抱きかかえた。

芙美は「そういう言い方せん」といて「と僕をにらむ。「お父ちゃんもお母ちゃんも、うちらを一所懸命育ててくれたんやけん」

②わわかつている。

わかっているからこそ、ひねくれてしまう。冷やかな話し方や笑い方になってしてしまう。芙美のように素直になれない。裏返せば自分の負い目から逃げていることでもあるのだと——それだつて、ちゃんと③わわかつているのだ。

芙美は明日から、両親への感謝の思いを日々の暮らしで示していくことなる。同居というよりも、ウむしル介護の日々は、決して楽しいことばかりではないはずだ。芙美自身はもとより、憲和さんや裕一郎くんにも迷惑をかけてしまうだろう。「だいじょうぶ、みんな覚悟しとるけん」と笑う、その覚悟よりもさらに深い苦勞に、いつか直面してしまったとき、僕は妹の家族になんをしてやれるのだろうか……。

いくらからの生活費を負担するからといっても、それで息子としての責任を果たせんだと言い切るほど、僕はずうずうしくはない。

だが、「じゃあお兄ちゃん、代わってよ」と言われると、逃げるようにうつむいてしまうしかない。

東京は遠い。

東京には、両親の親戚や知り合いは誰もいない。

「嫁」よりも「娘」のほうが、父も母もき気兼ねなく世話になれる。

3LDKのマンションに家族四人で暮らしているわが家とは違って、憲和さんと芙美の家なら庭もあるし、エめったに使わない和室を一部屋、両親のために空けることもできる。風呂やトイレも、一戸建てなので介護bシヨウにリフォームするのはさほど難しくない……。

理屈はいくらでも並べられる。いや、そんな理屈を僕に並べさせる間もなく、芙美は当然のように「お父ちゃんとお母ちゃんの間倒はウチで見るけん」と言ってくれた。

「ごめんな」と「ありがとう」を何度も芙美に言った。

「ありがとう」はともかく、「ごめんな」を口にする、そのたびに芙美は困った顔をする。気持ちちはわかる。僕だって立場が逆なら、「ごめんな」を繰り返されたら嫌な気がする。かといって、「ありがとう」だけでも、やっぱり④面白くない。

X があればいいのに。

僕たちの人生には、その一言が必要な場面はたくさんあるはずなのに。

百科事典の箱をワゴンまで運ぶ途中、オモつと大きくて、もっと重そうな箱を二つまとめて抱えた裕一郎くん^①に追い抜かれた。荷室で待ち受ける憲和さんは僕から箱を受け取ると、軽々と奥に持って行った。

電気工事の会社に勤める憲和さんは四十を過ぎても現場に出て、高圧線の鉄塔に上っている。

小学生の頃から野球に夢中の裕一郎くんは、甲子園の常連として知られる私立高校から誘いが来ているらしい。

やはり、憲和さんには、もう「くん」付けはできない。裕一郎くんも「裕ちゃん」からは卒業だ。子どもの頃から勉強はできてもひ弱だった僕は、「男」としての根本的なところで、二人に負けている。妻と娘二人に囲まれた東京での暮らしは、「男」であることを問われる機会はめったにない。だが、それは、Y なのかもしれない。

「お兄ちゃん、もうええよ、ほんま。裕一郎もトレーニングのつもりなんやから、やらせてやって」

「うん……」

「あと、子どもの頃に買うてもろうた本も、お母ちゃん、持って行く、言うてるよ。いろんな絵本やら子どもの文学全集やら……せつかくやけん、読んでみる？」

まだ封をしていない箱が、居間にいくつか置いてあるのだという。

「お兄ちゃんの好きやった『カロリーヌ』もそっちの箱に入れてあるけん。初恋のひとに再会してくれば？」

芙美はいたずらっぽく笑った。

カロリーヌというのは、フランスの絵本作家ピエール・プロブスト^注が書いたシリーズのヒロインだ。

リボンで二つに束ねたブロンドの髪に、真っ赤なサロペットの少女——居間に置いてあった段ボール箱から一冊取り出して、ひさしぶりに再会した。

ああ、これだ、これだったんだ、と自然と⑤頬がゆるむ。

金色のケースに入った『世界の童話』シリーズを母が買い集めていたのは、僕が小学校に上がるか上がらないかの頃だった。『世界の童話』には、タイトルどおり世界中の「古典」や「名作」

が数多くcシユウロクシユウロクされていて、母もそういう作品を僕と芙美に読ませるつもりで買ってくれたのだろう。

だが、僕が夢中になったのは、ラインナップの中でもいちばん時代が新しい『カロリーヌのシリーズ』だった。

『カロリーヌのおともだち』『カロリーヌのぼうけん』『カロリーヌのせかいのたび』『カロリーヌのつきりよこう』……確か四冊買ってもらったんだっけ、という記憶どおり、箱には古びた四冊の絵本が入っていた。

「古典」ではない。「名作」かどうかも、じつを言うと、よくわからない。本屋で「今日は何を買うて」とカロリーヌの本を棚から出すたびに、⑥母はちよつと複雑な表情をしていたものだった。

それでも、カロリーヌのお話はどれも、とびきり面白かった。カロリーヌと八匹の動物たちの旅や冒険に胸を躍らせ、ストーリーや絵の内容をすっかり覚え込んだあとも、何度も何度も読み返した。

この部屋だ。庭に面した和室——「居間」というより「茶の間」と呼んだほうが似つかわしい六畳間で、まだ幼かった僕はカロリーヌの絵本を読んでいた。母は芙美の遊びに付き合いながら「そんなに面白いん？」と訊いてきて、僕が「面白いよ」と答えると、「カロリーヌちゃんが可愛いからやる」と、からかうように笑っていたのだ。

『つきりよこう』をケースから取り出して、ページを開いた。

子どもの頃は本を広げると目の前いっぱい絵が広がっていたのに、おとなになったいまは、絵本のサイズが一回りも二回りも小さくなった。

d埃埃っぽいような、カビくさいような、カサカサしたようできて湿っぽいような、古本独特のにおいがたちのぼる。

ものを食べこぼした覚えはないのだが、紙には茶色い染みがいくつも散っていた。綴とじがはずれそうになるのを補強したセロハンテープは、固く黄ばんで、無理にはがすと本も一緒にばらばらになってしまっそうだった。

そんな古びた本の中に、カロリーヌがいる。

年齢はいくつだろう。絵の雰囲気からすると、七、八歳あたりのような気がする。当時の僕にとっては「お姉ちゃん」だったわけだ。

あの頃はもっと美人だと思っただのにな、と苦笑しながらページをめくる。

カロリーヌと仲間たちの冒険は細かなところまできちんと覚えているつもりだったが、読み返してみると、記憶と食い違っている箇所がいくつもあった。こんな場面あったっけ、と首をひねったり、あの場面は『つきりよこう』じゃなかったんだっけ、と別の本を手にとったりしながら、つい夢中になって読みふけてしまった。

鼻先にまとわりつく古い本のおいは、ページをめくるにつれて、どんどん濃密になってくる。最初のうちは決していい感じはしなかった。においと一緒に、なにか不潔な菌でも混じっているような気がして、思わず息を詰めてしまったほどだった。

だが、⑦そのにおいが、しだいに懐かしさ呼び起こしてくる。

茶の間にごろんと寝ころんで本を読んでいた小学生の僕が、ここにいる。目には見えなくても、確かに、この部屋のどこかにいる。お兄ちゃん、遊んで、遊んで、とまとわりついてくる芙美も

いる。怒ると怖かったがお酒に酔うと陽気になる父もいる。家事と内職に追われて、いつも忙しそうに立ち働いていた母もいる。

古く、狭い、平屋建ての借家だ。父と母は「わが家」を持つことはなかった。おかげで自宅を引き払うための手間暇や厄介事は最小限ですんだのだが、父も母も、気兼ねなく暮らせる持ち家の「わが家」が欲しかっただろうな、とは思う。

「どうする？」と両親に訊かれたのは、東京の大学に進学して間もない頃だった。

土地を買って家を建てることを考えている、と両親は言った。僕がいずれふるさとにUターンするつもりなら二世帯住宅にするから、とも言われた。

僕の答えは考えるまでもなく決まっていた。帰郷するつもりなど、はなからなかった。東京で就職して、東京で結婚して、東京でわが家をかまえる——結果として、そのとおりになった。自分が長男であることを忘れたわけではなかったが、僕には僕の夢があり、人生がある。

両親は僕の選んだ道に一言も反対はしなかった。わが子に夢をかなえさせてやるのも、両親にとっては親のeツトめ¹だったのだろう。

家の新築の話は、そのまま立ち消えになった。もしかしたら両親は、僕の気が変わり、あるいは状況が変わって、ふるさとで同居をすることもありうる、と考えていたのかもしれない。その夢を捨てきれずに、今日まで、築四十年を超える古い借家に住みつづけていたのかもしれない。

両親がこつこつ貯めてきたお金は、結局、父が定年退職した後の生活費に回された。父が脳梗塞で倒れたあとの入院やリハビリも、その貯金でまかになった。

芙美の家で同居することを決めたあと、母は僕に長い手紙をよこした。預金通帳と印鑑を芙美に預けるのをゆるしてほしい、という手紙だった。

反対する理由も資格も、僕にはない。もちろん、遺産相続がどうのこうのと言いだすつもりもない。

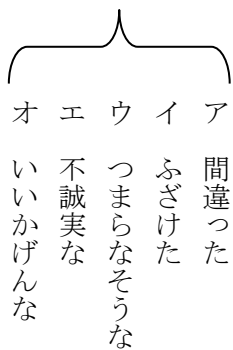
あとで、芙美には僕のつくった預金通帳と印鑑を渡すつもりだ。ある程度のまとまった金額を入れてある。それで長男としての責任をお役Z²にしてもらおう——というわけでは、決してないのだが。

注 1913年フランス生まれ。2007年没。1955年にカロリーヌを主人公にした絵本を発表。

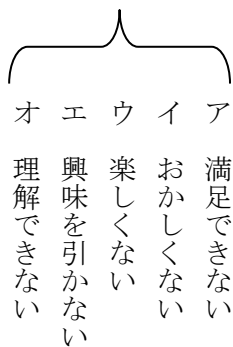
問一 二重傍線部aとeについて、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二 傍線部①「ごんざいな」、④「面白くない」、⑤「頬がゆるむ」について、本文中の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

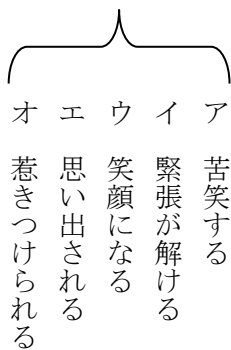
① ごんざいな



④ 面白くない



⑤ 頬がゆるむ



問三 波線部ア・イ・ウ・エ・オの中で品詞の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問四 傍線部②「わかっている。」、傍線部③「わかっている」とあるが、何が「わかっている」のか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちを一生懸命育ててくれた両親の気持ちにはわかっていて。だが、両親の介護を美に押し付けた自分には負い目があり、快くそれを引き受けてくれた芙美のように無邪気に両親への感謝の思いを言えないこともわかっている。

イ 家計が苦しい中、百科事典を買ってくれた両親の気持ちはわかっている。だが、介護が必要となった両親のことを思うと、その辛さから目を背けたくて、元氣だった両親を思い出させる百科事典に対して冷淡になってしまいうこともわかっている。

ウ 子どもたちには勉強させて進学させたかたという両親の思いはわかっている。だが、両親の期待通り、大学にまで行ったのに、両親の面倒すら見られない自分の情けなさを直視できず、素直に感謝の言葉を言えないこともわかっている。

問八 傍線部⑦「そのにおいが、しだいに懐かしさを呼び起こしてくる。」とあるが、『カロリーヌ』のシリーズを読んで、「僕」はどのような思いに及んでいるか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 子どもの頃抱いたカロリーヌへの初恋の気持ちを思い起こし、今の自分から見るとカロリーヌはたいして美人ではなかったという思いに及んでいる。
- イ 本を読んでいた自分やまとわりついてくる美美的姿を思い起こし、いつも陽気だった父や忙しそうに立ち働く母への思いに及んでいる。
- ウ 家族が日常を過ごした茶の間の風景を思い起こし、自分の選んだ道のため、持ち家を持たなかった両親への思いに及んでいる。
- エ 茶の間で本を読んでいた自分の姿を思い起こし、持ち家を両親に諦めさせてしまった自分の人生や夢への思いに及んでいる。
- オ 古い本に染みついたたにおいの懐かしさから、本の内容が記憶と食い違っていることを思い起こし、過去への思いに及んでいる。

問九 空欄Zに入る語を漢字二文字で答えなさい。

問十 本文の内容の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 両親と一緒に暮らせないことや両親の面倒を妹に見てもらうことについて、すまないと思いつつも、引越しの手伝いもうまく出来ず、途中で子ども時代に読んだ本に夢中になってしまい、「僕」がますます自己嫌悪に陥っていく様を描いている。
- イ 引越しの手伝いをして現在の「僕」と『カロリーヌ』に夢中になっていた子ども頃の「僕」が、時を超えて同じ家の「茶の間」で重なり、幸せだった過去の「僕」に出会うことで現在の「僕」が再生する様を描いている。
- ウ 介護が必要になった両親に何もできない自分でもどかしい中、子どもの頃夢中になった絵本を読み、家族四人が幸せに過ごした子ども時代の記憶に耽ること、自分のできることをすべきだという思いに「僕」が駆られていく様を描いている。
- エ 両親の引越しの手伝いをしている「僕」が、両親が自分や妹のために買ってくれた百科事典や『カロリーヌ』を手取る中で、介護が必要になった両親の面倒を妹に見てもらうことへの思いや両親の愛情の深さを再認識する様を描いている。
- オ 引越しの手伝いの途中、「僕」は両親が買ってくれた百科事典を見つけ、小学生には無駄だったとひねくれた思いを抱くが、かつて夢中になった『カロリーヌ』を再読するにつれ、両親への感謝の気持ちが深まっていく様を描いている。

(三) 次の文中の空欄にあてはまる最も適当な語句を選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

① 計画が () 拍子に進む。

ア とことん イ たんたん ウ とんたん エ どんどん

② あの人は、() のしたたか者だ。

ア 有象無象 イ 海千山千 ウ 森羅万象 エ 八方美人

③ 傘をお持ちでない方は、() ますか？

ア おり イ おられ ウ ござい エ いらっしやい

④ 他人の小さなミスを () で非難している人がいる。

ア 知らん顔 イ 人待ち顔 ウ 涼しい顔 エ したり顔

⑤ 司法官や弁護士などの社会を法曹界、歌舞伎役者の世界のことを () という。

ア 梨園 イ 角界 ウ 芸苑 エ 業界

⑥ () ような緊迫した思いのなかで日々過ごしていた。

ア 猿も木から落ちる イ 薄氷を踏む ウ 飛ぶ鳥を落とす
エ 雲をつかむ

⑦ 彼女はいつも () をもたせた言い方をする。

ア 空気 イ 雰囲気 ウ ふくらみ エ 含み

⑧ お気に召すかわかりませんが、お送りしたお菓子を () ください。

ア ご賞味 イ ご笑味 ウ ご賛美 エ お召し

⑨ ゴッホは絵の () によくヒマワリを用いている。

ア イメージ イ モチーフ ウ エレメント エ ロジック

⑩ 彼は () 素晴らしいダンサーだ。

ア あられもない イ 不世出の ウ 粒揃いの エ 月並みな